

一 櫻に鶯木が違ふ

辻潤は僕を氣でも狂つたと思つたのか、僕がレニンに電話を掛けて、千萬圓借りたがつてゐると都新聞に書いた。

僕は、弟が間もなく死ぬると、父が手紙を寄こしたので、電車に乗つて涙を流した。

何が最初僕を狂氣にしたかを、僕は考へて見ねばなるまい。

人間が息をしなくなると死ぬる、でも息をしてゐれば生きてゐるのだとは言ひきれない。

何時から僕は氣が變になつたのか、自分では解らない、しかし凡その所から僕は書こう。

發狂した事を敢て自慢にするには及ばないかはり、貸借關係には影響しないと思ふ。

僕は神田の女子齒料醫學專門學校の中の一室に寝とまりしてゐた。そしてめしは外で食つてゐた。

『勞働者』の發行人になつてゐた殿水が、僕を其處へ引つ張つて行つたのだ。望月桂が畫を描きに来る同人圖按社と言つてゐた。尾行が朝晩門の所に立つて待つてゐた。主義者の若いのが三四